おはなしのくにクラシック

文語詩「椰子の実」

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実一つ

ふるさとの岸をはなれて
なれはそも波にいく月

もとの樹は生ひやしげれる
枝はなほ影をやなせる

われもまたなぎさをまくら
ひとり身のうきねの旅ぞ

実をとりて胸にあつれば
新たなり流離の憂ひ

海の日のしづむを見れば
たぎり落つ異郷のなみだ

思ひやる八重の潮々
いづれの日にか国に帰らん